「小学校おさかな学習会」に対する子供たちの反応

「小学校おさかな学習会」は、大きく分けて 3 種類に分かれています。

〇おさかなゼミ（1 時間）

　座学：パワーポイントでお魚の話、漁業の話、栄養の話

〇模擬漁体験（0.5 時間）

　カツオの一本釣り、投網の体験

〇タッチプール（0.5 時間）

　イセエビ、タコ、カワハギ、ヒラメ、ウニ、ナマコ、ヒトデ、ネコザメ、などを触る。

〇料理教室

上記のコーナーを 1～6 年生の児童（最大で 1,000 人/校　規模）に対して行うため、触られる魚達はもちろん、模擬漁体験を指導する我々も体力勝負となります。

児童にとっては 2 時間と限られた時間のため、少しでも印象に残り、少しでも魚が好きになるように児童達の反応を見ながら話す内容やタイミングを毎回工夫しながら実施しています。

「おさかなゼミ」では、海には大きい魚や、小さい魚が生きており、小さい魚は大きい魚に食べられ、我々人間はそれらの魚の命を頂くから食事前に「いただきます」の挨拶をすることを話します。命を頂くためにどのような漁があるかを映像や画像で説明し、マグロはえ縄漁の釣り針や、メカジキのクチバシ等を触らせながら、少しでもイメージがしやすいような学習会になるように心がけています。

一般では手に入りにくい映像も準備し、マグロ漁場への移動で大型船が船以上の高さの波に揺られる様子や、カツオの一本釣りでカツオがポンポン釣れる様子を見て、歓声や笑う声が上がりますが、それだけで終わってしまっては勿体ないと、「模擬漁体験」の際に幾つか言葉を加えるようにしました。

カツオ一本釣りの模擬漁を体験させるだけでも印象に残るのですが、体験後漁師さんのカツオの一本釣りの映像と比較させて感じた内容を聞くと、大体「映像では簡単に釣れていたが、予想より重かった」という反応になります。そこで、模擬漁で使用したカツオ模型 3Kg の倍以上のカツオが釣れる事もある事を話すと、驚く児童が多くなります。それもそのはず、3 kgのカツオ模型を釣り上げるには、1 年生で 4-5 人掛かり、6 年生になってようやく半数程度が一人で持ち上げられるレベルです。

６年生女子二人で、やっとカツオが持ち上がる

さらに、漁が行われるのは、揺れる船の中である事、暑い日も寒い日も、雨の日も風が強い日も、漁師さんは頑張っているという事を説明すると、「大変じゃん！」「漁師さんはスーパーマンみたい！」と言う児童も出てきます。児童達の集中力を見極めながら、高学年に対しては更に踏み込み、カツオが頭の上に落下すると危険なので、ヘルメットをかぶって漁をする事も説明します。ここまで話すと、事後アンケートで、「命を頂くだけではなく、漁師さんの労力も無駄にしないために残さず食べようと思いました。」などの反応が現れてきます。魚と言う食料を説明する以上、皆に無駄なく食べて貰いたいため、模擬漁の 30 分でここまでわかってくれれば御の字と考えますが、同じ内容を１年生にも求めてしまうと難しすぎて逆効果になる可能性もあるため、高学年以上を目標にしつつ、反応と集中力を見ながら説明をします。

上記のように、我々にとっては、おさかなゼミや模擬漁で考えて欲しい事が「わかって欲しい・覚えて欲しい」事ですが、やはり児童にとって一番の楽しみはタッチプール。

「魚に触れて面白かった」と言う反応が一番多い中、「魚が見るのも嫌いだったけれど触れるようになった」という反応もあり、魚を料理するには、魚を触る必要があるという当たり前の事に気づかされます。

水族館のタッチプールで魚を触った経験がある 1 年生の児童もいれば、水族館に連れて行って貰った事が無い 5.6 年生もおり、初めて魚に触ったと興奮している様子を見ると、魚に興味がある児童だけを対象にするのではなく、不特定多数の児童に対して魚の講義を行える小学校という場は貴重であると感じます。

魚が苦手な児童はイセエビ、貝、タコにタッチ

魚を食べて貰うため裾野を広げる目的の活動ですが、一か月後の事後アンケートでは、約2～3割が魚を食べる機会が増加したという結果に落ち着き、増えた理由は、学習会の後に、「子供が親に魚の話をして親が料理を増やしたか」、「子供が魚料理を増やしてほしいとお願いしたか」、のどちらかで、料理に関しては親が関わる要素が大きいのも事実です。

先月報告した小学校での料理教室のように、児童が魚料理を行った結果は、男子は 3 割強、女子は5割が魚を食べる機会が増加し、料理教室を行わない場合よりも我々にとっては望ましい結果となりました。まだ2例分のアンケートを集計中のため、それらの結果も見ながら、時間に限りがある中でも、魚を好きになって貰えるようなアピール方法を模索していく事が重要になると感じました。

以上、8小学校（約3,100人）を訪問して感じたことです。

今後も、児童が楽しく親しみを感じながら、無理なく魚を好きになって貰えるような学習会を続けられたらと考えています。